# 国語の基礎50選　三年　組　氏名（　　）

★①～㊿の（　　）に適する語を、漢字を正しく用いて答えなさい。　②点×（　　）

| 得点 |
|---|
| |

① 「（古今和歌集）」は日本で最初の勅撰和歌集で、七五調、優雅で技巧に富んだ歌集である。
② 二大随筆集として有名な「（徒然草）」は兼好法師の作である。
③ 「（万葉集）」は、日本最古の歌集で、当時のあらゆる階層の人の歌が集められている。
④ 「春はあけぼの。ややう白くなりゆく・・・」の出だしで始まる随筆は「枕草子」で作者は（清少納言）である。
⑤ 「性」の漢字の部首名は（りっしんべん）という。
⑥ 「進」の漢字の部首名は（しんにょう）という。
⑦ 「視」の漢字の部首名は（しめすへん）という。
⑧ 「障」の漢字の部首名は（こざとへん）という。
⑨ 「空」の漢字の部首名は（あなかんむり）という。
⑩ 相手を高めるために自分や身内のことをへりくだって表現する言葉を（謙譲）語という。
⑪ 話の相手や話題にしている人を直接高めて表現する言葉（尊敬）語という。
⑫ 文末を名詞で止め、余情を残す表現技法を（体言止め）という。
⑬ 「まるで綿のような雲。」の文中に使われた表現技法を（直喩）法という。
⑭ 「おいしい、このケーキは。」の文中に使われた表現技法を（倒置）法という。
⑮ 「広い広い海。」の文中に使われた表現技法を（反復）法という。
⑯ 「太陽が笑っている。」の文中に使われた表現技法を（擬人）法という。
⑰ 「サラサラ」・「ぴかぴか」など物事の様子を表現する語を（擬態）語という。
⑱ 詩を、使われる用語の上から分類すると、（口語）語詩・文語詩の二つになる。
⑲ 俳句では、必ず一つだけ季節を表す（季語）を入れる。
⑳ 俳句で使う「や・かな・けり」を（切れ字）という。
㉑ 江戸時代に俳諧を芸術的な文学に高めたのは、（松尾芭蕉）である。
㉒ 俳句の季語を集めたものを「（歳時記）」という。
㉓ 季語や十七音の定型にとらわれない俳句を（無季自由律）俳句という。
㉔ 明治時代、故郷への思いを強く歌い、三行書きの新しい形式で短歌を書いた人は（石川啄木）である。
㉕ 友情と信頼の美しさを描いた太宰治の有名な小説は「（走れメロス）」である。
㉖ 自立語の中で、述語になるものを（用言）という。
㉗ 自立語の中で、主語になるものを（体言）という。
㉘ 助詞・助動詞を合わせて（付属）語という。
㉙ 「食べた」の「食べ」は、バ行下一段活用・（連用）形の動詞である。
㉚ 「きれい（だ）」の品詞名は（形容動）詞である。
㉛ 一文節には、（自立語）が必ず一つある。
㉜ 接続語の中で「それで・だから」は順接、「しかし・ところが」は（逆接）を表す。
㉝ 「美しい」の（仮定）形は、「美しけれ（ば）」である。
㉞ 助動詞の「れる・られる」の意味には、受け身・（自発）・可能・尊敬がある。
㉟ 「話す」のへりくだった言い方は（申す）である。
㊱ 「走る」の品詞は動詞で、活用の種類は（五段）活用である。
㊲ 「この自動車は走らない。」の「ない」は助動詞で、「ここに自動車はない。」の「ない」は（形容）詞である。
㊳ 「見る」の動詞の活用の種類は（上一段）活用である。
㊴ 「やめて　おく。」のような文節と文節との関係を（補助）の関係という。
㊵ 「大きな山」の「大きな」は、（連体）詞で、「大きい山」の「大きい」は形容詞である。
㊶ 「彼の考え」の「考え」のように、「考える」から名詞に転じたものを（転成名詞）という。
㊷ 「口に出して言わなくても気持ちが通じること」の意の四字熟語を「（以心伝心）」という。
㊸ 「自分の力では及ばない」という意味の慣用句は「（歯）が立たない」という。
㊹ 故事成語の中で、「なくてもよい無用なもの」という意味の言葉は「（蛇足）」である。
㊺ 同訓異字「おさめる」は、成功を（収）める・費用を（納）める・国を（治）める・学問を（修）める。
㊻ 古文（文語文）において、「ぞ・・・ける」「こそ・・・けれ」という関係を（係り結び）の法則という。
㊼ 語句の後に付けて、いろいろな意味を添えたり品詞を変えたりする言葉を（接尾）語という。
㊽ 熟語の読み方で「役場」のように上の字を音読み、下の字を訓読みするものを（湯桶）読みという。
㊾ 音と意味を組み合わせて「清」のように別の意味を表した文字を（形声）文字という。
㊿ 物の形をかたどった絵文字から成立した文字を（象形）文字という。